

# えりも岬 緑化事業60年

—えりもの海岸林の植生回復をめざして—



写真1

現在のえりも岬

北海道えりも町にある「えりも国有林(写真1)」は、えりも岬の東側沿岸に沿って細長く延びる約421haの地域で、国定公園、飛砂防備保安林、保健保安林及び魚つき保安林に指定されています。

えりも国有林のうち約190haについては、かつて荒廃し(写真2)、「えりも砂漠(写真3)」と呼ばれるほどの状態でした。今回は、60年という長い歳月をかけた今日までのえりも国有林における植生回復の取組について紹介します。

## ■えりもの森林の荒廃

今から約300年前、えりも岬では、アイヌの人々が海藻類や魚介の採取により暮らしていたと伝えられています。当時は、カシワやミズナラ、ハルニレ等を主体とする広葉樹で覆われており、これらの森林が風速10mを越える風や飛砂などの厳しい気象条件から人々の生活を守っていました。しかし、その後の燃料としての伐採や牛

馬と綿羊の放牧地の開拓、バッタの大群による被害等が原因で、森林は傷つき、さらに、えりも岬特有の強風や冬の土壌凍結にさらされて、雑草さえ生えなくなりました。表土が露わになった大地からは、赤土が舞い上がり、「えりも砂漠」の様相を呈しました。この飛砂は、沖合10kmにも達し、岬沿岸の海は黄色く濁り、魚は減少し、昆布など海藻類も採れなくなり、人々の生計や暮らしも大変困難になりました。

## ■困難を極めた緑化事業

飛砂の原因である禿山等の緑化を求める声に応じて、昭和28年4月1日に「えりも治山事業所」が開設され、本格的なえりも岬緑化事業の第一歩が踏み出されました。

荒廃した土地を復活させるには、まず裸地を草地に復旧する草本緑化を行い、その後木の苗を植えて育てる木本緑化を進める必要があります。えりも岬の緑化事業は、禿山に草を根づかせるため山腹編柵(※1)、丸太谷止(※2)などの基礎工事を進めるとともに、粗朶(※3)、葎簀(被覆材料)を使用し、飛砂の防止や種子等の飛散の防止などを地元住民との協力の下、実施しました。しかし、強風による破壊など作業は困難を極めました。様々な試行の末、昭和32年頃から、地元住民の提案で、海岸に打ち上げられたゴタ(雑海藻)で種子と肥料を覆う(写真4)、

写真2



昭和20年代のえりも岬

写真3



えりも砂漠の様相

「えりも式緑化工法」と呼ばれる画期的な方法が開発され、禿山は草本によって緑化されました。

草本緑化が完了した後、植栽樹種や植栽方法などの試行錯誤の結果、クロマツを主体に広葉樹のカシワ、アキグミ、イタチハギ等を選定し植栽しました。さらに厳しい気象条件の緩和を図

写真6



蘇ったえりもの森林

写真5



ベルトユニット工法

写真4



ゴタ(雑海藻)をまく

るための防風垣(※4)、防風土塁(※5)、ベルトユニット工法(※6)(写真5)、ハードルフェンス(※7)等により植栽木を保護した結果、えりも岬に立派な森林が蘇りました(写真6)。

このような地元住民の方々との継続的な緑化活動が認められ、地元住民の中心となって緑化活動をしてきた「えりも岬の緑を守る会」が「吉川英治文化賞(※8)」を受賞し、さらにえりも岬が「日本の白砂青松100選」に選定されるなどえりも岬緑化事業は、高い評価を受けています。

また、平成18年には、天皇后両陛下が、えりも国有林の緑化事業地を御視察されました。

### ■えりも岬緑化60周年記念事業の開催

平成25年6月8日、9日の両日には、えりも岬での緑化事業が60周年を迎えたことを記念し、「2013 森と海のフェスティバル」をえりも町内で開催しました。

8日は、えりも岬・風の館シアターにおいて緑化事業の歴史が上映され、えりもの緑化の意義等がPRされるとともに、参加者約1000人が見守る中、さらに多くの方に森林整備に参加していただけるよう地元団体と森林管理署、地元団体と民間財団の2つの協定の調印式(写真7)が行われました。9日は、えりも町民など参加者約500人が集まり、えりも町百人浜(国

有林)でクロマツ約2,000本の記念植樹(写真8)や稚魚(マツカワ)2,000尾の放流などが実施されました。

### ■えりもの森林のめざすもの

えりもの森林造成は、昭和28年から60年間に及ぶ裸地→草本緑化→木本緑化の過程において成果を上げ、飛砂防止等の効果を得ています。

現在、えりも国有林では、この先50年、100年を見据えた森林づくりが進められています。将来にわたって森林の機能を高めていくため、現在、木本緑化され、クロマツの一斉林となっている区域において間伐を行い、カシワやハルニレ等の広葉樹が生育できる環境づくり(図1)に努め、様々な状況に耐えることのできる海岸林へと育てていく必要があります。

これらの緑化事業が海岸林の造成事業の見本となるよう、今後も地域との強い連携を保ち、森と海の絆を多くの方々に感じていただける森林づくりを進めていきます。

- ※1山腹編組(さんぶくへんさく)・・・粗朶等を帯状に編み上げる冊
- ※2丸太谷止(まるたにどめ)・・・丸太による土砂流出を抑制する施設
- ※3粗朶(ぞだ)・・・細い木を集めて束状にしたもの
- ※4防風垣(ぼうふうがき)・・・木材等による壁面により植栽木等を強風から守る冊
- ※5防風土塁(ぼうふうどるい)・・・人工砂丘・土砂を盛土により強風から守る土塁
- ※6ベルトユニット工法(べルトゆにくとこうほう)・・・幅50mの団地状(ベルト状)林帯と空間地を交互に設置し植栽する工法
- ※7ハードルフェンス(はーどるふえんす)・・・丸太を組立て植栽木を強風や東上地中の水分が凍って、地面が持ち上げられる現象から守る防風垣
- ※8吉川英治文化賞・・・日本文化の発展のため讃えられるべき業績をあげた個人及び団体に与えられる賞

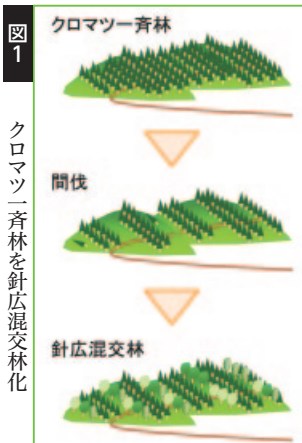


写真8



「2013 森と海のフェスティバル」記念植樹

写真7



協定書の調印式